博物館藏版

教草 第四

生糸一覧

凡そ日用に供する衣食の如き人皆之を衣し之を食して何ところを知らさるもの多し其物品を改正良善にするの術に暗く徒に新規の發明なく國産を繁殖せしむる各其業に就く事を知らざる故に父兄たる者其子弟をして幼時より各業の大畧を知らしむるときは他日脩產の基となるべし嚮に明治六年澳國博覧會出品の際に乘じ十各種職業の教草を編成せしめ画図を加へ以て童蒙に便せり然るに舊版第一より第廿四まで昨八年七月の火災に罹りしにより今之を再刻し兼て從前の謬誤を正し遺漏を補えしむと雖も其図の舊版を再刻する者の如きは鮮明ならざるあり看者之を恕せよ且我國産の多き此一部の盡す所に非ず此餘の如きは以て他日に譲る

明治九年二月　田中芳男記

第一 稲米 第二 糖製 第三 養蚕 第四 生糸 第五 樟虫
第六 野蚕 第七 葛布 第八 苧麻 第九 草綿 第十 織緯草木
第十一 索麪 第十二 葛粉 第十三 藍 第十四 青花紙 第十五 製茶
第十六 烟草 第十七 漆 第十八 蒔繪 第十九 蠟 第廿 白搾
第廿一 疊表 第廿二 香蕈 第廿三 製紙 第廿四 蜂蜜 第廿五 油 一
第廿六 臙脂 第廿七 澱粉上 第廿八 澱粉下 第廿九 褐腐 第卅 豆腐

版權所有

教草 第四 生糸一覧

蠶事既に終て繭を拾収するに種に取と絲に製するの二方あり種に取には中のさなぎの斃ざる様に鄭重包護して架上に載置べし若夫之を絲に製するには先づ太陽に晒して蛾も蛹も出ざる様に二日も三日も能干して貯ふべし其干加減は之を炎天に曝して太陽已に西山に傾き繭へ濕氣を受て而後に拾収すべし若し繭を日の照る内に拾収すれば絲に繰れども甚だ善しからず又連雨數日にして繭を干事能ざる時は或は之を井樓に入或は之を火圍爐に掛て乾すべし

蠶のさなぎに化する期限は順叙氣候に寒暖計七十度位なれば七八日にて蛹に成なり若其さきより早して未だ化せざる物を或は日に干し或は火圍爐に掛る時は蠶の足が絲にからんで宜からず

繭拾収してより五十日前を方俗初繭と称す乃ち煮に暇を取ず絲端の立も宜しき故に繰るも亦暇を取ずして而も絲の量目も甚多し由て拾収の後は急速に製すべし

繭巣放ましてより大率十日前後に及んで蛹化して蛾となり又蛆と成て繭を喰破て出る故に絲を製せんと欲せば豫め繭に疵の附ざる様に防ぐべし

繭に成て後八九日目に至て繭を並べ置る籠に繼合せる紙を覆て之を太陽に晒す事二日許中の蛹を悉く干し殺し而后風氣運行の宜き所に安置すべし國々にて籠に大小ありと雖も大抵五升より七升位を一枚として好し又方大釜に湯を沸騰せしめ其上に井樓を置き繭を納れ其中に桑葉二三枚を入れ澁紙を覆て蒸し葉色の變ざるを度として蛹を殺すべし又方凡そ縱五尺横四尺許の助炭箱を制し數個の抜箱を設け底は厚き紙を帖し是中に繭を充實し一箱毎に桑葉二三枚づゝ入上より下へと幾度も交換し其葉乾燥して色變り手にて揉に細末に成を度として貯ふべし

繭を煮る水は濁水及び井華水は繭の絲端を損し量目も大に減却し光澤も従て消亡するなり故に煮水は如何にも源遠く流れ清く混々として瀉ぎ来りし水を又砂ごしにして用ゆるときは其益極めて廣大なり

絲を製するに手繰器械の二方あり器械は近時の發明する処手繰は往昔より流傳する處なり先づ其手繰の方法を辨ぜば大凡繭一貫錢を三十許に分割し其一を取て鍋内に入るなり始は繭五六粒より終り七八粒許の絲端を一筋に寄合せ繰を上等とす中等下等に至ては始七八粒より終り十二粒計にも合するなり

其法鍋の測に馬の尾又は婦人の毛髪を小さき輪に作て結びつけ此穴より絲を通し左手の示指中指に絲を捻りかけ右手の五指にて籆を廻轉して製するなり

器械は方今國々にて種々行るゝと雖も先年は何れの國にても皆手繰のみにて而も生絲の美名海外に輝しなり近年に至て二口取り一口取と云ふ物あり何れも皆鍋より直に籆に繰る故に絲に撚なくして且節多し又繭の絲端に心を用ざるより太細齊しからず是近年遠人の謗を免れざる所以なり

萬力仕掛一人繰六人繰等の器械ありと雖も大體生絲は磨きと撚なくては絲に節もなく纇もなく絲體圓滑にして而も强靭なり

何れの繭にても始は繰易き物なれども時間移るに従て繰難くなる故に如何にも注意して繭は少づゝ煮を第一とす若夫其妙処に至ては予が筆墨の盡すべきにあらず

明治六年春 桑撰 耕画

男爵田中美津男氏寄贈 先代田中芳男男爵旧蔵書 昭和七年

B 65992

東京大学総合図書館